

香製品のデザイン研究

-20代30代のライフスタイルをベースに-

Design Investigation of Incense Products

- Based on the twenties/thirties people's lifestyle -

■ 黄 田愷 Tianskai HUANG

愛知県立芸術大学大学院 本田 敬研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：お香の文化と歴史、ライフスタイル、持続的な発展

はじめに

仏教や道教が主流のアジアの国では、お香を焚くことは身を修め性を養う文化としてあった。現代では、リラックスと瞑想の方法の一つになっている。

近年、養生、ヨガ、瞑想などのキーワードが20代から30代の間で大きな関心を持たれている(図1)。このようなライフスタイルの下で、人々のアロマ製品に対するニーズが増え続けている。粗悪なお香の燃焼は有害物質を含み、使用者の健康を害し、火災の危険もある。同時に速いリズムの現代生活の中では、伝統的なお香の不便さや不興などが原因で、あまり好まれなくなっている。このままであれば、この文化はいずれ消えしまう可能性がある。

キーワード日平均検索回数



キーワード検索の年齢分布図

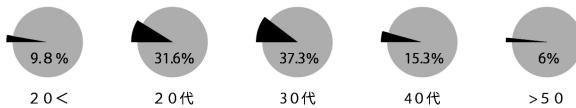


図1 「養生、ヨガ、瞑想」のキーワード検索回数と年齢分布データ
(BaiduZhiShu 2016~2020)

今のライフスタイルはスピードであることがあたり前になっている。通勤、食事をはじめ、仕事や休憩に至るまで、生活のあらゆる場面でスピードの速さが重要視されている。しか

し、どうやってスローにできるかは誰も教えてくれない。養生、ヨガ、瞑想などの言葉が検索されるのも、スローライフを望んでいるからだろう。速い生活のリズムの中で、人々は「スロー」を希望している。

お香を燃やすことは人の心を落ち着け、心を安らかにさせる効果がある、現代人のストレスを緩めることができる。従って、このようなお香で生活のリズムを緩める生活方式をデザインを通して、若い世代に伝えたい。従って、お香の文化の持続的な発展を維持するためには、お香を現代人のライフスタイルに合わせる必要がある。

本研究では、特に20~30代の若い世代のライフスタイルにマッチした、歴史のお香の使い方をリサーチして、現代の香製品をデザインすることを目的とする。

1. お香の歴史と文化

1.1. 中国

お香の文化は、祭祀用として中国の石器時代から始まった。時代が変わるために、お香の使い方も日常生活でも使えるようになってきた。中国の隋唐時代の海上のシルクロードの開拓に伴って、生活用のお香の種類や方式が多様になってきた。香炉薰香以外、匂い袋、香時計、薰服、印香など日常のお香の使い方になって、外出にも欠かせないものになっている。

1.2. 日本

日本のお香の文化の歴史は、飛鳥時代から始まった。当時は中国と同じく主に祭祀用のお香だった。鑑真が唐から渡ってきて、お香の種類と使い方を伝えたことで、お香の文化が発展した。平安時代には、中国のような薰服や香薰寝物の道具がある。江戸時代はお香の文化の最盛期であり、線香やタワー香など現代でも使っているお香の使い方が生まれた。

また、お香で時間を記録することもある。芸者がサービスをしている時にも線香の燃焼で料金を計算していたという。

1.3.西洋

西洋のお香の文化の歴史は、主に精油の抽出と蒸留の技術に現れている。古代エジプトでは、ミイラを作るために白檀や肉桂、没薬などの香料が防腐剤として用いられた。没薬のことをミルラと称し、ミイラの語源となっている。中世になると蒸留技術が発展して、抽出した液体の香りがたくさん出てきた。しかし、抽出の効率が非常に低いため、値段も高く、現代でも同様である。時代を経るにつれて、今私たちが見ているアロマオイルに変容してきた。



図2 世界各国のお香の種類

2. デザインの方向性

お香文化の歴史のまとめを通して、次の二つのデザインの方向を提出した。

- ・ 現代も引き続き使われているお香の使い方をさらに現代と合う形へ改良する。
- ・ もう使っていないお香の使い方を、娯楽や趣味として使えるように提案する。

デザインの方向によって、薰服、匂い袋、香時計、煙を観ずることの歴史と使い方を分析しながら提案を始めた。

3. 試作

3.1. 薫服

薰服(図3)は古い時代に人気があったお香の使い方である。薰服は、服に香料の匂いを付けること、すなわち薰服だ。香りによって違った体験をすると同時に、服の乾燥や除菌などの効果を維持することができる。旧来の使い方を再検討することによって、現代のライフスタイルと合う形でデザインしていく(図4)。また、提案の実行可能性の検証をするために、襟巻を電子香炉の上に置いたまま、実験を行った(図5)。



図3 歴史の薰服画像と使い道具の写真

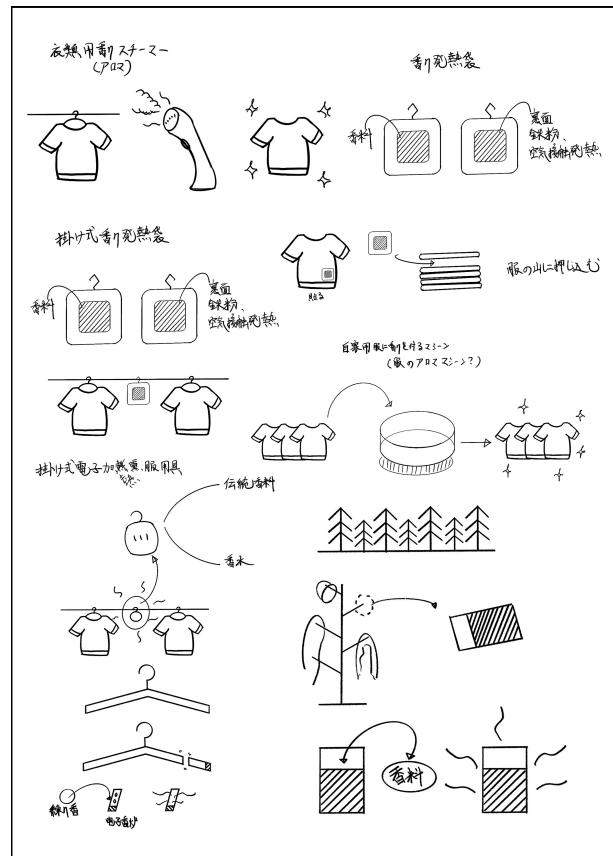


図4 薫服アイデア発想(一部)



図5 薫服実験

3.2. 匂い袋と薰球

匂い袋と薰球(図6)は、昔の中国や日本で人気があったお香の道具である。アクセサリーとして身につけるもので現代であれば、香水の瓶を身に付けるようなものである。今ではこのような重い道具はもう日常生活に適していない。また、時代の変更によって、私たちが身につけているものも変わってきた。身の回りで身につけているものを手に入れて、日常生活に融合させることを試み(図7)。



図6 歴史の匂い袋の写真

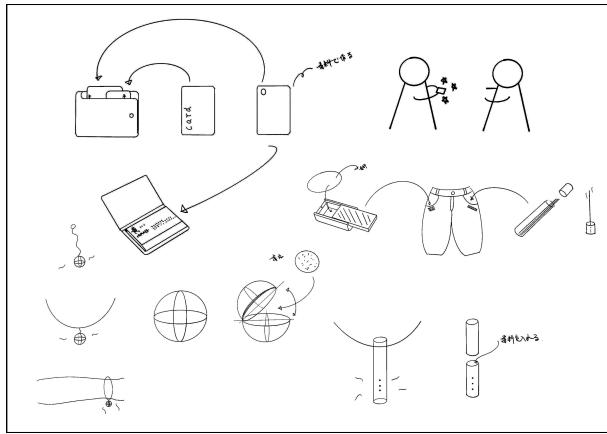


図7匂い袋アイデア発想(一部)

3.3.香時計

古代の人々はお香の燃焼を用いて時間を計った。時間を記録するその道具は香時計(図8)と呼ばれている。現代において、人々はより便利な方法で時間を記録している。もし現代において、香時計で時間を記録すれば、いろいろ問題が生じるだろう。例えば現代の時計と比べて面倒であり、市場もなくそもそも、誰も買わない。香時計の特徴は緩める変化と不確かな時間だと考える。休憩したい時、正確にどれくらいか時間を決める必要はない。時間という概念を意識させない工夫をし、現代の香時計デザインを考えていく(図9)。

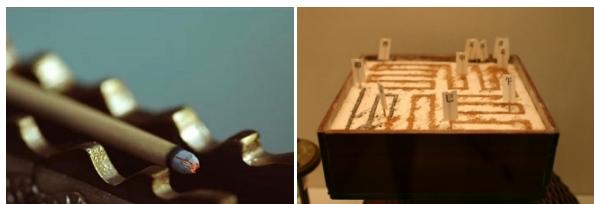


図8香時計

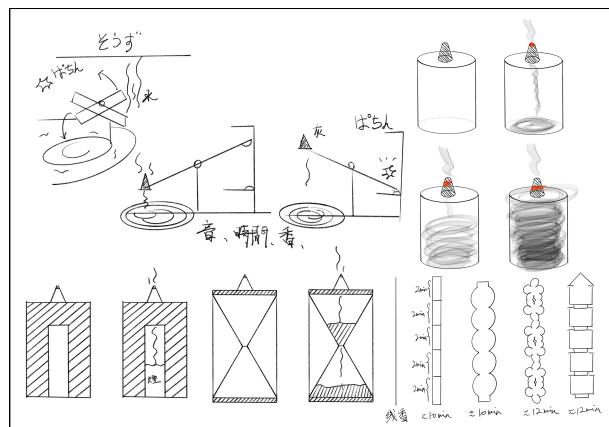


図9香時計アイデア発想(一部)

4. 実験

4.1.煙を観る

お香文化においては、煙を観るという言葉がある。日本の禪文化では、物が哀えることを美しいとする見方がある。お香の衰えた美しさとは、お香が燃えて生まれ変わる煙と灰と言える。煙を観ることはお香文化の視覚的な体験の一つである。煙が空中に薄れゆく様子は動態だが、心の静態に近い。煙の静態な表現は時間がゆっくりと流れるのと似ているところを感じていた。それを検証するために、透明の薰香容器イメージと煙の収集実験(図10)を行った。実験の煙は砂時計のように収集され、視覚的効果も高まり、匂いだけではなく、視覚と嗅覚の二重体験が行える。従って、煙で時間の流れを表現することを構想している。



図10 煙の収集実験

4.2.煙を聴く

お香の文化では、「香りを嗅ぐ」ことより大事なのは「香りを聞く」である。本研究では、自分の心を聴き、自分を落ち着かせることを指す。お香と「聞く」の間の関係、つまり音声の間の関係を考察したい。煙の収集実験を通じて、煙と霧のそれぞれの体験に大きな差があると分かった。煙の緩やかな変化は、人々を落ち着かせやすい。そこで、本研究では煙の変化を用いて、「聞く」とお香を結びつけていく。

この実験(図11)では、音楽のリズムが変化すると、煙が音楽のリズムとともに踊り始めた。これは誰も心が引かれた体験だと判断した。同時に、実験道具の開口のサイズと形状の違いによって、煙の運動も変化した。このような特殊な体験について、ユーザー調査を行った。ユーザーがこの装置を見る時、視線は知らないうちに音楽のリズムによる煙の変化を見つめていた。このような心が引かれた体験を、私たちの日常生活に持たせ、人々に異なる香り文化の趣を示していく。実

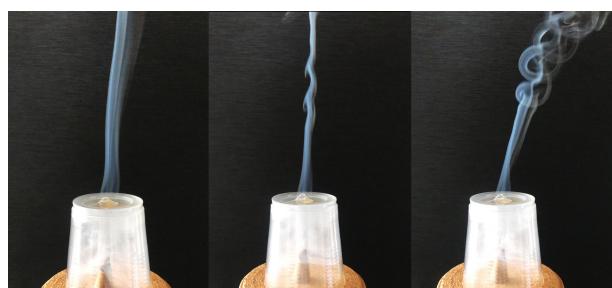


図11 煙と音波振動の実験

験とインタビューの結果より、人々がこのような装置を見た時の本能的な反応と体験を分析し、キーワードをまとめ、音、煙、お香を結びつける提案を始めた(図12)。また、提案の実行可能性の検証のために、一つの提案を選んで、模型を作って実験を始めた(図13)。

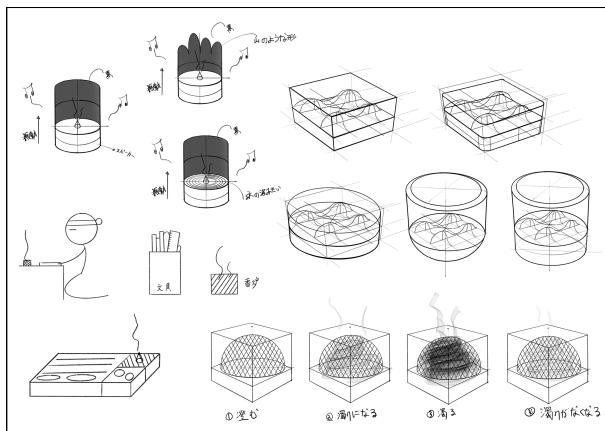


図12 煙を観るアイデア発想(一部)



図13 音、煙、お香を結びつける提案実験

5. まとめ

本研究2021年度前期にはお香の文化の歴史資料を調べて収集した。歴史の中でいくつか興味深いお香の使い方、薫服、匂い袋と薫球、お香時計、煙を觀ることになどが存在したことがわかった。その使い方を分析しながらいくつか実験を行った。今後の研究では、可能性が高いアイデアを改善して実験を行う。また、造形と使用体験を検討し、試作品の製作を始めていく。

他参考文献

- ・ 菊地 俊英、『匂いの世界』、みすず書房、1972
- ・ 岩崎 陽子、『香りと芸術－日本の伝統芸術「香道」をめぐって－』、2003
- ・ 張梵、『中国の沈香文化と歴史』、2019
- ・ 太田 清史、『香と日本文化』、におい、かおり環境学会誌、2008
- ・ 渡辺 えり代、『お香を現代生活に活かす』、におい、かおり環境学会誌、2013

- ・ 関口 真大、『匂い・香り・禅』、日貿出版社、1972
- ・ 周申、張凌浩、『プロダクトデザインにおける禅の文化的意義とシンボルの特徴の分析』、2013
- ・ 常正、『香品、香具と香の文化』、法音、2005
- ・ LiSikun , Mou Feng , Sun Jing、『ユーザーのファジイ評価に基づく中国の香文化製品の体験デザイン』、2017
- ・ Brian Morean、『Fragrance and Perfume in West Europe』、2008